

---

# **三分で！ダマされないための『歴史・経済の教科書』**

怒満坊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三分で！ダメされないための『歴史・経済の教科書』

### 【Zコード】

Z8151

### 【作者名】

怒満坊

### 【あらすじ】

ロスチャイルド、ロックフェラー、モルガン…学校で習う歴史には書かれていない、闇の歴史。彼らが織り成す、歴史に、光を当てる。

筆者のネームの由来は、「怒り満ちる坊」だ。

「坊」は、夏目漱石の「坊っちゃん」からいただいた。とても気に入っている。その名の通り、筆者は、いつもふんふんしている。

二ホンザルに、ペンをもたせれば、それが「筆者」だ。

おサルの住む国日本は、なんといっても、自殺大国である。年間三万人が死んでいる。

戦争ですか……??

セカンド・インパクトの予兆かもしれない。

たとえば、広島・長崎の原爆での死者が、たしか、33万人ほどだつたと記憶している。

つまり、十年もすれば、自殺者数 > 原爆死者数 となるわけだ。

政治とは何だろうか。

人は、どこからか生まれて、いつしか死んでゆく。

死んだ後の世界は、誰も知らない。それを明かすのが宗教らしいが、宗教は商売である。

政治の本質は、このような「渡世の場」である社会において、誰もが安らかに過ごしていける社会を築くことではなかろうか?? 自然界は、我々に厳しい。裸一つで生まれてくる人間に、雨風は、我々の身体に容赦なく荒れ狂う。

そこで、「衣・食・住」を、我々は作らなくてはならない。

それが、社会だろう。人は、生きていくためには、自然と共に存しながらも、これとは異なった有機的世界を作らねばならない。

まあ、いろんな意見があらわ。

しかし、筆者は思うのだ。

これって、そんなに難しいことかと??

何がこんなに、これを難しくするのだ???

何がこんなに、自殺者を増やすのか??

こんな疑問を感じた読者の方よ、筆者とともに、違う人間の歴史を紐解いて見ようではないか。

## 善悪に主義思想なし（前書き）

「過度な社会主義は、全体主義であり、過度な資本主義は、帝国主義である」

## 善悪に主義思想なし

社会主義・共産主義について語りつ。

現在、この経済制度を採用しているのは、

- ・中国
- ・北朝鮮
- ・ベトナム
- ・ラオス
- ・キューバ

である。

実質、中国は、資本主義国家であるつ。

過度の情報規制は、独裁主義であり、情報の規制などといつもの  
は、我らが日本やアメリカでも行われていてことと、社会主義国家  
特有のものではない。イギリスは、いまだに貴族制度が現存し、貴  
族の子息は、21歳になれば、自動的に、議員になれる。これが、  
民主主義の実態である。「理想」と「現実」は、水と油である。  
したがつて、地球上に、報道の自由などはない。

あるとすれば、卑猥なポルノであり、これも、一種のプロパガン  
ダである。

彼らの標語は、「映画・SEX・麻薬」である。「カルト宗教」  
を加えれば、支配の正方形が完成する。

マルクスは、「宗教はアヘン」だと言つた。

皮肉なことに、マルクス主義自体も、國家統治のための擬似宗教  
に成り下がつた。

マルクス主義は、？分析理論の部分と、？イデオロギーの部分に  
分けて考えた方が分かり易い。

？：分析理論のマルクス主義は、「生産資本の私的独占を通じた、

資本家階級による労働者階級の疎外と搾取」であり、これは、現代の開発途上国・先進国にも、十分当てはまる支配構造である。マルクスの功績は、経済のメカニズムを、科学的に分析し、構造的理解を提示したことにある。

? : だが、彼の失敗は、先走りすぎたことにある。

なぜなら、イデオロギー部分には、科学的根拠がないからだ。「社会主義革命」、つまり、労働者階級が主体となり、段階的に、共産主義体制に移行するというものだ。

しかし、これは、現代にあてはまるものではない。

なぜなら、マルクスの時代は、普通選挙制など整ってなく、一部の民族は、人権すら認めてもらえなかつた時代だつたからだ。それゆえ、選挙制度が、制度として整備された現代では、「革命」などというものは、正当性を保ちうるようなものではない。「革命」といい、どれだけの人間が死ぬことになるだろうか??

(以上、土屋彰久著『教科書が教えられない政治学 現代史スペシャル』より)

それゆえ、イデオロギーの部分において、マルクスは、批判していた空想社会主義そのものになつてしまつた。

科学的根拠を欠き、ヨハネの黙示録のような、オカルト理論である。

後世の人間は、マルクスの、この宗教的な部分を、熱狂的に賛美し、礼賛した。

実際、ソビエトが樹立したが、蓋を開けてみれば、スターリンの独裁であり、巨大な官僚国家であつた。

ソビエトは崩壊した。

崩壊後も、オリガルヒといわれる、新興ユダヤ人が、すべての資本を独占していた。労働者などどこにもいなかつた。

したがつて、現実を、主義思想で眺めることはかなり危険である。あの国は、社会主義国家だといつても、実状は、ただの独裁主義である。また、民主主義だといつても、この日本が、果たして、真の民主主義国家であろうか？？検察審査会のメンバーすら教えてもらえない、この日本が？？

日本は、アメリカ直属の、お上國家である。

陰謀論で、よく語られるのは、ユダヤ人は資産を独占し、金に汚い、皆悪だという極論に至るものがある。

しかし、ユダヤ人の貧困層は、ゲットーと呼ばれる差別地区に隔離され、ほとんどが低所得労働者であった。アウシコビツツに送られたユダヤ人も、ほとんどが、極貧者層であり、支配とは全く無関係であった。そもそも、アウシコビツツは、一つの商売であったのだが…また後ほど。

それゆえ、ユダヤ人は皆悪だという言葉に惑わされてはならない。  
人種は関係ない。  
主義思想も無意味である。  
事実が眞実を語るだけだ。

## 愚弄バリズム【一】（前書き）

### 【ジャーナリズム三原則】

歴史を忘れてはならない。  
歴史を偽ってはならない。  
歴史を知らなければならぬ。

## 愚弄バリズム【1】

ホワイトハウスを『牛』耳る、アメリカの食肉業者たち。  
我々は、日々、その口に食している。

現在、ほとんどのチェーン店・ファミレスは、特別な表示がなければ、

アメリカ産牛を使用している・・・

### 【四大食肉業者】

スミスフィールド・フーズ（全米豚肉トップ）

－ズ・パッカーズ

タイソン・フーズ（全米チキン王者）（買収）

（世界最大の精肉業者・アイオワ州）

アイオワ・ビ

コングラ（買収）　アーマー（20世紀のビルゲイツ、

穀物商社）

カーギル（貿易自由化の最大勢力）（買収）　世界第一位の穀物商社コンティネンタル・グレイン

（買収）　山一ファイナン

ス（山一證券の子会社）

コンティビーフ（コロラド州）

カクタス・ファイダーズ（テキサス州）

ゼネラル・ミルズ

。

## 【それらの肉を扱う・米飲食企業】

マクドナルド ピザ・ハット ケンタッキー・フライドチキン  
ン バーガー・キング ウォルマート・・・

## 【事件】

2002年7月、『コンアグラ・ビーフ』社の肉から、O·157が検出される。回収するも、その廃肉を、スペゲッティなどのミートソースに利用している可能性が指摘された・・・

2003年12月、ワシントン州の農場で、狂牛病に感染した牛が発見された。アメリカで初めてのこと。隠蔽に奔走。「ダウナー牛（だめ牛）」だと説明。

農務長官アン・ヴェネマンと通商代表ロバート・ゼーリック（現世銀総裁）が、密着し、「狂牛病問題」の隠蔽に骨折ってきた。

ヴェネマン農務長官は、検査する牛の数を、二万頭から四万頭に、引き上げると宣言した。しかし、2004年七月、牧場で死んだ異常牛のほとんどが、検査されていないというニュースが流れ、全米中を驚かせた・・・

また、コンアグラの精肉工場では、同僚6人を射殺して、犯人が自殺する獵奇事件が起こった。この肉の処理工場は、不潔さと、それを消毒する薬が氾濫し、それを見たら、輸入肉が食べられなくなるほどの光景だといふ。

こうした食肉業者は、『全米肉牛生産者協会』や『肉牛畜産振興会議』を結成し、ホワイトハウスに、貿易自由化のロビー活動どころか、ホワイトハウス入りし、グローバル化を促進しようとしている。

タイソンフーズの顧問弁護士ジェームズ・ブレアは、アーカンソー州知事クリントンを担ぎ出し、パメラ・ハリマン女史とともに、

クリントンの大統領選挙を支援した。その後、フーズファミリーは、クリントン大統領とともに、ワシントンを占拠。その時の、財務長官ロバート・ルービンは、シカゴ取引所で、飼料穀物の取引を支配してきた男である。

なぜ、貿易自由化を促進するのかが、これで氷解するはずだ。

## 愚弄バリズム【2】

いつした、自由貿易が広まれば、日本の企業以上に、人材も資源も恵まれた、歐州多国籍企業が、莫大な利益をあげるのは眼に見えている。

その頂点に立つのが、『ヨーローヴァー』だ。

あらゆる日用品を扱い、あらゆる食品を扱う『ヨーローヴァー』は、あのお馴染みの貝殻マーク『ロイヤル・ダッチ・シェル』の兄弟会社である。日本の大手石油会社『昭和シェル石油』は、その子会社である。

『ヨーローヴァー』は、東南アジアの植民地企業であった『リーヴァイ・ブラザース』（リーヴァイ・コーエン）と『マーガリン・ヨー』が経営統合してできた会社。その『リーヴァイ・ブラザーズ』は、ユナイテッド・アフリカ（UFC=United Afric a Company）を所有しており、文字通り、アフリカを支配していた。

このような戦前から、世界を支配してきた歐州企業に、戦後から、ようやく、発達してきた日本のような企業が敵うわけもないものである。

なぜなら、歐州企業は、ほぼ、あらゆる会社が親戚であり、その中枢に君臨するのが、かのロスチャイルド家であるからだ。彼らは、金融から食品、そして原子力まで、ありとあらゆる事業を、その手中に収めている。

GATT（関税貿易一般協定）で、誰が得をしたか？  
アメリカに巢食う穀物商社たちである。

カーギル

ルイードレフス

コンティネンタル・グレイン

ブレゲ アンドレ アーチャ・ダニエルズ・ミッドランド

この中でも、ずば抜けているのが、『カーギル』である。しかし、その実態は、秘密のヴェールに隠されており、

アメリカの住民でさえも、その存在を知らない人が多い。この秘密穀物会社に、資金を与えていたのが、チエース・マンハッタン銀行・・・その会長が、世界皇帝と謳われる「デヴィッド・ロックフェラー」である。彼は、新生銀行の社外取締役でもあつた・・・

さて、こつした巨大穀物企業の背後について、同じくらいの力をもつのが、穀物を保存するための「倉庫」<sup>サイロ</sup>を所有する製粉企業なのである。製粉企業は、四つの“家族”に牛耳られ、しかも、その“家族”は、一つのファミリーを形成している。

ウォッシュバーン家（ゼネラル・ミルズ副社長スティーブン・ロスチャイルド）  
ピルズベリー家  
（全米精米業者協会） リチャード・ベル（大統領農政委員会）  
クロスビー家  
ベル家

なぜ、製粉会社が、「精米」なのか？

『全米精米業者協会』とは、通称、Rice Millers Association - RMA である。Millerとは、「製粉業」の意味もある。つまり、小さな米業界の資本家に介入し、「米の自由化」から、日本との交易に穴を開けようとしたわけである。

勿論、日本の外交官は、知らなかつただろう・・・『全米精米業者協会』に、カーギルの子会社トレーダックスや、ルイ・ドレフェ

ス、アーチャー・ダニエルズ・ミッジランドという小麦・穀物の大商社が名を連ね、米のみならず、ありとあらゆる農産物の自由化を狙つていたことを・・・

ガットで、日本に大きな圧力をかけたのは、以下の人物たちである。

### カーラ・ヒルズ

(『アンハイザー・ブッシュ社（あのバドワイザーの会社）』の重役ローデリック・ヒルズの妻)

子会社『ブッシュ農業資源社』　全米精米者協会　に入りしている

リチャード・ビル（国際小麦会議のアメリカ代表、精米会社『ライスランド・フーズ』の社長）

こうした実態を、日本人は知らない。

彼らは、国の利益を代表し、“経済上の平和”、“人類の協調”を目的としていたわけではない。

簡単に言えば、自分のメリットになるからやっていることなのである。彼らにとって、外交とはビジネスであるからだ。金融、食品、薬品、自動車、航空機・・・すべてが、欧米では、地脈でつながり、たとえ、後継者争いはあるとしても、それらは、利権という“一本の鎖”でつながり、なにかあれば、資金を糾合して、この地球全土に、利益を拡大する機会を狙つているのである。

グローバル化と、容易く唱えるのは間違っている。  
特に、農産物に、グローバル化など、必要ない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8151j/>

三分で！ダマされないための『歴史・経済の教科書』

2010年10月10日10時23分発行